

平成26年度

大正大学大学院学術研究助成
成果報告書

大正大学大学院学術研究助成一覧

(個人研究)

<新規>

法蔵教学の研究——空海に引用される著作を中心に——

研究者 鈴木雄太

研究課題	法蔵教学の研究 ——空海に引用される著作を中心に——
研究者	鈴木 雄太 (仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻一年)

1. 研究目的

本研究の目的は華嚴教学（なかでも、華嚴教学を大成させたと言われる法蔵の教学）と真言教学を比較することにある。両教学が最も交錯するのは、空海の著作における法蔵教学に対する言及箇所であろう。従って、ここでいう法蔵教学とは空海の著作に引用される部分を中心となる。

空海の主張に従えば、真言密教は究極の教えである。その上で空海は、真言教学を除けば華嚴教学が最も優れた教えであるとした。空海自身、華嚴教学から多大なる影響を受けており、自らの教学の中にも多分にその思想を取り入れている。

真言学において、空海の教判論から真言密教が究極の教えであることは周知の事実であるが、真言教学と華嚴教学の具体的な相違点がはっきりと捉えられているとは言い難い。また、先行研究においても、空海教学における華嚴教学からの影響に言及するものや、空海の教判論に即した形で真言教学の優位性を主張する論攷は数多くあるものの、空海以外の視点から真言教学と華嚴教学を比較した研究は少ない。

空海自身の著作と華嚴教学をダイレクトに比較すると、そこには当然、空海の視点が多分に入り込んでいる。空海というフィルターを通さずに両教学を比較するためには、後代の両教学に造詣の深い学者の著作を見ることが必要となろう。そのような学者の一人に聖憲がいる。

聖憲は頼諭の加持身説を継承し、新義真言教学を大成させた。また、真言教学とともに諸宗の教学にも研鑽し、なかでも久米田寺の盛誉（1273-1351）から華嚴教学を学び、『五教章聴抄（以下『聴抄』）』を撰述しており、聖憲

の中で華嚴教学は重要な位置を占めていた。

そこで本研究では、聖憲の華嚴教学に対する解釈を分析することで、真言教学と華嚴教学のどこが相違し、あるいはどこが共通しているのか、体系的に捉えるための一端としたい。

2. 研究方法

本研究は、空海に引用される部分を中心に法蔵の著作を読み進めながら、その部分に対する聖憲の言及を取り上げ、聖憲の立場から真言教学と華嚴教学を比較する方法を採る。

『弁顕密二教論（以下『二教論』）』には、『華嚴五教章（以下『五教章』）』が引用されている。前述したように、聖憲の著作には『五教章』を注釈した『聴抄』がある。また、聖憲の代表的な著作である『大疏百条第三重（以下『第三重』）』の中にも法蔵教学に対する言及が見られる。

『二教論』における『五教章』の引用箇所は「果分不可説」がキーワードとなっている。紙面の都合上、ここでは聖憲の「果分不可説」に対する解釈を中心に、本研究の成果として以下に報告する。

3. 研究成果と公表

(1) 『第三重』における「果分不可説」

① 果分不可説と加持身説法の同異

新義真言教学の特色を一言すれば、「自性身上の加持身説法」となろう。教主義について、古義が本地身説法を主張するのに対し、新義は加持身説法を主張する。新義の加持身説法とは「自性身上の加持身が如義語をもって説法する」ということである。

聖憲は加持身説法について、「花嚴の因果二分の法門に擬して、この義を安立す (T.79,p.675b)」と、「華嚴の果分不可説」と「真言の加持身説法」の論理構造が相似することを主張している。

華嚴の果分不可説の典拠は『十地経論』の

今、「我但説一分」と言う。この言、何の義あるや。この地の所撰に二種あり。一には因分、二には果分なり。説とは謂わく解釈なり。一分とはこれ因分なり。果分に於いて一分とするが故に「我但説一分」と言う (T.26,p.133c-134a)

にある。法蔵も果分不可説について、

この地法にその二分あり。果分は不可説なりと雖も、因分は可説なり。故に論経に「我但説一分」と云う。謂わく、因分は果に於いて一分となるが故に (T.35,p.298c)

と述べている。このように、華嚴教学では、果分そのものは説けないが、その一分は説くことができるとし、これを因分可説果分不可説と解釈している。

一方、聖憲は

至相の釈に云はく、「理は円なり。言は偏なり。言生ずれば理喪す。法に想相なし。思えばすなわち乱生ず」といえり。これは果性不可説の義を釈する釈なり。果分に説くべき法なしというにはあらず。法は円満なり。所説は一片なり。円満の法をもって果分とするが故に、果性不可説と云うなり。今もまたかくの如く、六大四曼等の各々の自体は一が処に一切を具足せり。これを自証の極位の法となす。機のために説く時は一相を施設するが故に、自証の法と云わざるなり。しかれども、自証にあらざるの法を説くにはあらず (T.79,p.675b)

と述べる。円満なる果分に対し、所説は一片である。つまり、円満なる果分の法も、言葉で示そうとすればその一相しか伝えることができない。同様に、六大四曼等の自体が自証極位の円満法であっても、この法を機に対して言葉で説くとき、その一相しか示すことができない。それがたとえ自性身上の加持身であってもである。この意味で、真言の加持身説法と華嚴の果分不可説の論理構造は相似している。一方、両者の相違とは、華嚴では一分を説くことを因分と位置づけるのに対し、真言は自証の法を説くとは言わないものの、自証ではない法を説いているわけでもない位置づける。

② 果分不可説と加持身説法の位置づけ

聖憲は自宗の法門に対し、四重秘釈によって解釈しており、それは「①遮

情の無相、②有相の有相、③無相の有相、④無相の無相」の四つである。この四重秘釈の内容を簡単に整理すれば、以下のようになる。

①遮情の無相－顕教の無相	－非如義語では説けない顕教の極位（如義語では説ける）
②有相の有相－有相で説く有相	－如義語で説く密教の極位への方法論　－真言行・儀軌　－劣慧の機のため
③無相の有相－有相で説く無相	－如義語で説く密教の極位　－密印・真言　－勝慧の機のため
④無相の無相－	－説法のない密教の極位そのもの　－法仏の内証　－機根に依らない

新義教学における加持身説法とは、法仏の説法を認め、自性身上の加持身が機に対して、如義語を用いて円満なる極位の法の一分を説くことをいう。そして、この論理構造が華嚴の果分不可説と相似している。しかし、果分不可説とは、華嚴の極位たる第一重の無相に対するものであり、華嚴ではこの境界を円満なる果分とし、その一分を因分として、因分可説果分不可説という。一方、加持身説法とは、真言の極位たる第四重の無相に対するものであり、この境界を円満とし、その一分を自証そのものではないが自証でないわけでもないとする。そして、新義教学において自性身上の加持身が説法するのはこの境界である。

(2)『聴抄』における「果分不可説」

聖憲は『聴抄』において、果分不可説に対し、二通りの説明の仕方をする。

説明① 事事の諸法は言に寄せざるに、円かに具足す。言に寄せる時は必ず法の全体をば談ぜず。謂わく、量を言に寄せざる時は即ち果分なり。この体、諸義を円かに具す。言に寄せて人の為にこれを説く時の諸義を一度に尽くすこと能わず。謂わく、量の上に無量の義門を具足せり（『大日仏』13,p.476 上）

ここでは、果分＝事事の諸法として、この境界には無量の義が円かに具足されているという。しかし、この境界を言葉で示そうとすると、その全体は表わすことはできない。その一方で、

「所詮の無量の義の中に一義を詮顕して余義を尽くさざるなり『大日仏』13,p.476 上）」と、無量の義の中の一義は示すことはできるとする。つまり、

ここでいう果分不可説とは、「果分=全体」の不可説であり、「因分=果分の一分」は可説ということになり、これは前述の『第三重』における説明と同様である。

説明② 一即一切一切即一は総標の分齊なり。指庠（委細に説く義なり）ならざるを、不可説と云う（『大日仏』13,p.476上）

ここでは、果分不可説に対し、委細に果分の内容を示すことができないものの、総標としては示すことができると解釈する。

以上が『聴抄』における聖憲の果分不可説に対する解釈である。聖憲は頼諭の解釈を受け継ぎながら、果分と因分の関係について体系的な説明を加えている。紙面の都合上、頼諭の解釈については割愛するが、頼諭は果分の不可説を強調するのに対し、聖憲は果分の一分の可説を強調している。

(3) まとめ

新義教学の教理の中心は加持身説法にある。非如義語では説けない顕教の極位を自性身上の加持身が如義語をもって説法する。そして、この境界を説き得ることを果分可説と称し、説き得ないことを果分不可説と称する。新義真言は、さらにこの上にもう一段階、如義語をもっても説き得ない密教の極位を設け、華嚴の極位と真言の極位に差別をつけた。

聖憲は「華嚴の果分不可説」に対し、円満なる果分を言葉で示そうとすれば、その一分しか示すことができないと解釈する。この解釈は法蔵も同様である。そして、聖憲はこの論理構造を「真言の加持身説法」に相似させる。

四重秘釈に当てはめると、加持身説法の論理構造とは第四重の「無相の無相」を言葉（如義語）で示すことができず、言葉（如義語）にしたときに伝え得るのは、その境界の一分のみである。そして、その示し得る境界とは第二重（有相の有相）と第三重（有相の無相）に当たる。一方、果分不可説とは第一重の「遮情の無相」を言葉（非如義語）で示すことができず、言葉（非如義語）にしたときに伝え得るのは、その境界の一分のみである。そして、その示し得る境界とは因分である。

つまり、同じ論理構造を持ちながら、示すときの言葉（如義語と非如義語）と、示そうとする境界（第一重と第四重）に両者の相違がある。しかし、両者ともに極位の全体を言葉で示すことができず、言葉で示そうとすると、それぞれの極位の一分を示すことしかできない点が、論理構造の相似という。

聖憲は『聴抄』を著す以前に師の順継・頼豪から真言教学を学んでいる。しかし、『聴抄』では真言の教理を述べず、華嚴の立場に即して註釈している。そして、『第三重』では華嚴の果分不可説の論理構造を利用し、新義教学の加持身説法を説明している。このことから、聖憲はひとえに真言の立場から自身の教理を主張するだけでなく、盛誉より学んだ正統な華嚴教学を活かして、自らの新義教学の理解の一助を担わせていることが伺える。

今後の課題として、まずは真言教学・華嚴教学に共通するその他のキーワード（例えば、「一生成仏」「初発心時便成正覚」等）に対する聖憲の解釈を検討し、引き続き聖憲の立場から真言教学と華嚴教学を比較する必要がある。そして、同様の作業を聖憲以外の各祖師の立場からも分析することで、より体系的に両教学を比較することが求められる。

本研究の成果については、第59回智山教学大会において発表し、その後『智山学報』に投稿する予定である。

主要参考文献

- 鎌田茂雄『仏典講座 28 華嚴五教章』、大蔵出版、1979
勝又俊教『真言の教学』、国書刊行会、1981
鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』、東京大学出版会、1993
榊義孝『新義教学の祖 頼瑜僧正入門』、ノンブル社、2003
智山伝法院選書 7『頼瑜—その生涯と思想—』、2000
智山伝法院選書 11『智山の論議—伝法大会と冬報恩講—』、2005